

● 座 談 会

ーセイフティエンジニアリング誌についてー

日時 2020年1月17日（金） 場所 アロマビル702会議室

出席者（50音順）

小川輝繁氏（総合安全工学研究所専務理事、編集委員）

高木伸夫氏（システム安全研究所所長、編集委員）

田村昌三氏（総合安全工学研究所理事長）

中村 順氏（総合安全工学研究所事業部長、編集委員）

星野 崇氏（総合安全工学研究所、編集委員）

松尾英喜氏（三井化学株式会社代表取締役専務執行役員）

司 会

福富洋志氏（放送大学神奈川学習センター所長、編集委員長）

1. はじめに

（福富氏）

本日はお集まりいただきありがとうございます。司会を私が務めさせていただきます。

おかげさまで、1974年（昭和49年）4月1日発行がセイフティエ



福富洋志氏

ンジニアリング誌（以下 SE 誌）の第1号でございますが、まもなく200号を発刊するところまで参りました。この第200号記念号では安全教育を中心とした編成を現在予定しておりますが、記念号発刊にあたり今日は編集委員の方、それから読者として、あるいは企業や大学で安全の研究や実務に携わっていらっしゃる方にご出席いただき、SE 誌の過去と現在と将来について語る座談会を企画させていただきました。どうぞよろしく申し上げます。

それでは、最初に小川先生から SE 誌の創刊の経緯、狙いにつつましてご紹介いただければと思います。

2. SE 誌創刊の経緯、狙いについて

（小川氏）

それでは、私のほうから、私の知る限りでお話しさせていただきます。総合安全工学研究所（以下総安研）の設立に非常に尽力されて、そのあと

運営に携わっておられました横浜国立大学の教授の福山先生がこの SE 誌に対していろいろ指導的役割を果たしておられました。福山先生の下に私はおりましたので、私が聞いている範囲で当初どうということから始まったのかについてお話ししたいと思います。



小川輝繁氏

総安研は、1973年（昭和48年）に設立されましたが、当時は、高度成長の後でもありますので、産業災害が非常に大きな問題になりました。事故ですとか、当時公害とっていた環境問題といったことが、企業の社会的責任もあり、いろいろ問題がありました。その時期に横浜国大に安全工学科ができて、横浜国大の北川先生、福山先生などが中心になって、経済同友会の代表をしておられた東京電力会長の木川田さんにいろいろお話されました。木川田さんからそれはいいことだということで、東京電力から資金を出していただいて総安研ができました。

総安研でどういう活動をするかについて、安全管理をされている企業の方達に対しては、当時安全工学協会（今の安全工学会）がありまして、そういう人に役に立つような資料、情報あるいは学術的研究を安全工学協会の雑誌でいろいろやられていました。それはかなり専門的な話ですので、

そうではなくて、一般の現場の従業員の方を教育するものが必要ではないかと、当時総安研を指導しておられた方々が考えておられました。その他にも、経営者の方にあまり技術的でない方もおられるので、経営者の方にも、現場の従業員の方にもそういうことがよくわかってもらえるわかりやすい雑誌が必要ではないかということ、福山先生はよく言っておられまして、総安研でSE誌を発行しようということになりました。

最初は福山郁生先生と、横浜国大の上原陽一先生、当時の産業安全研究所の機械安全の部長さんをされていた近藤太二さん、それから労働衛生関係では昭和大学の山口裕先生の4人が編集委員としてやっておられました。

その方達で相談されて、普通の学術雑誌は文字も小さくて、専門の方で興味を持つ人は読めますが、一般の人にはなかなか読みづらい。そこで、一般の人に読みやすいように、一つはカラーにしてイラスト、写真を中心に、文字も比較的大きくする、それから当時そういう雑誌のサイズはB5判が多かったのですが、それをA4判と大きくしてはじめられました。狙いは一般の人が気軽に読んでいただくということでした。

一般の従業員に読んでいただくということで、賛助員の会社の方にお配りしているのですが、一社150部と非常に多数の部数を賛助員の会社にお送りして、皆さんが読みやすいように現場においていただいて、活用していただくことが狙いでした。その後イラストや写真を中心としたカラーの科学雑誌「ニュートン」が発行されたのは7年後でありましたので、当時の発想としては画期的でした。創刊号にはイラストが多く入っていました。そのあとSE誌の編集や発行で努力された方は岡崎篤司さんという方です。最初は岡崎さんが全体を作られていました。

その後もいろいろ変遷がありましたが福山先生が中心になっておられました。そのため福山先生の考え方が、かなり雑誌の編集の中にありました。例えば、表紙にはずっと写真が使われていましたが、これは福山先生が非常に写真が好きでして、普通の雑誌では表紙に内容を書きますよね。だけどそういうことはされなかった。なぜかとい

うと写真を傷つけるのはよくないという、考え方を福山先生は持っておられたからです。

編集担当の女性の方も次々替わっておられるのですが、SE誌のスタイルがかなり大幅に変わったのは阿曾壽子さんが担当されてからです。阿曾さんは、もともとご主人と一緒に編集の仕事をしておられそれなりの編集に対する考えを持っておられた方で、彼女のアイデアで今のスタイルになりました。表紙にイラストを入れて、記事タイトルを表紙に載せ、表紙のイラストの中で安全にかかわる「ちょっと一言」を裏表紙に載せるという形に変わりました。

SE誌については皆さんが気軽に読んでいただくということが一番の願いでした。以上です。

(福富氏)

小川先生ありがとうございます。表紙がイラストに変わった時のお話がありましたが、表紙のイラストに潜んでいる安全の落とし穴を裏表紙で明らかにするつくりは、SE誌の大きな特徴になったと思います。

3. SE誌に対する読者の反応や企業の安全活動に対する成果・評判など

(福富氏)

まずSE誌の編集担当として、知りたいのはどんな評価があるのだろうかということです。それを読者でありそれから企業の安全活動に対して活動されている方々、あるいは安全工学のご研究、指導をご担当の方あるいは、かかわりの深い皆様からご紹介いただければと思います。SE誌に書いてあったことが直接的に役に立ったということはなかなかないと思いますが、これはSE誌の効果だなということをお感じになったことを含めて少しお話をいただければと思います。

(松尾氏)

小川先生からこれまでのSE誌の流れというもののお話があったのですが、1974年からですからもう46年ですかね。会社でもこれだけ長く維持するというのは大変なのですが、それこそ雑誌がこれだけ長く愛読されているというのは、それだけ要請が世の中にあるということだと思います。

実は私も40年来の読者でありまして、福山研の

学生の時からです。企業に入ってすぐ現場だったので、現場の最前線の人たちにSE誌を見ながらいろんな話をしたりしていました。思い出すのは福山先生



松尾英喜氏

の最初のころのSE誌の表紙ですが、今はイラストレーターの今野さんがイラストを描かれていて、このイラストが、私はSE誌の内容・役割を表しているのではないかと思います。非常に楽しみなんですね。最先端の話題を表紙にイラストで描かれて、裏に何が出てくるだろうといつも楽しみに裏を次に見るのですが、絶対の安全はない、危険はどこにでもあるのだということです。我々も現場というのは安全対策をとるのですが、必ずそこにトレードオフの問題が生じてきますので、リスク、危険が発生することがあって、そういう感性を常に持たないと、なかなか目の前のリスクだけに目が行ってしまふ。SE誌はいろんな分野に取り組んでおられ、製造業、化学の我々の業界だけでなく、医療があったり、物流があったりして、それぞれが我々に関係ないかという安全というのは境界がないわけですから非常に我々参考になるのです。写真があり、絵があり、後ろでなく横に脚注の説明があったりして非常にわかりやすくなっています。これは最初の目的である現場の人達に、あるいは時間のない経営者の人達にも理解をしてもらうということにすごく役立っているのではないかと思います。

まず安全というのは、事例から学ぶ、それから技術を知る、それから評価、そして教育、それからいろいろな人の連携というふうなことというのが重要だというのは、このSE誌を見ながら感じています。それが各企業のところにもしつかりと理解していただく人たちがおられるということだと思っていますので、今後もぜひ企業として利用していくことができる、あるいはしていかなければならないというふうに思っています。

(福富氏)

では次に高木さんいかがでしょうか。編集委員でもあり、いろんなところで安全の啓発をなさっておられるので、いろんなところでSE誌の手ごたえを感じておられるのではないのでしょうか。

(高木氏)

私が編集委員として参加したのは、30年弱ぐらいになるのかなと思います。企業の中から引き受けておりまして、当時は福山先生が編集委員長で、とにかく



高木伸夫氏

くわかりやすい安全をという視点で、平易な内容の原稿をのせるということが福山先生のご意志であり、それに従った原稿を集めて掲載しました。なかには、原案として受けて、編集委員会のほうで内容を訂正するというのもまれにあったのですが、勝手に変えたからけしからんとクレームがでたこともあります。

福山先生が委員長のころは、産業安全分野が多かったといえます。安全管理システムとか、事故事例の紹介であるとか、現場安全に関する記事がどちらかという主体だったといえます。それに対してそのような時代から社会がどんどん変化してきており、現在では、医療、情報、社会安全、テロ分野にまで広がってきています。

私は、プロセス安全のコンサルという形で企業の方と接することが多く、企業の安全管理をされている方からは、学術誌と違ってイラストが多いのでわかりやすいという意見を多くいただきました。かつては150部を企業に送っていましたが、受け取った担当者が読んで、これは面白い記事だとか参考になる記事だと思われる、他の部署にも紹介するというのも聞いており、現場で広く活用されていたといえます。

ただ、最近ちょっと難しい記事も多いかなと思うこともありますし、そういう意見も聞きます。一方興味のある人にとってはあの記事は面白かつ

たということも聞きます。ただ私の専門分野は産業安全ですので、この分野の記事はこれからも提供できたらなと思っています。もう一つは、社会も変わってきていますので多様な分野の情報を提供することが、企業に役に立つのではないかと考えています。雑誌というものは、ずっと同じスタイルでいいのかという問題はどこもあると思います。時代の流れと変化というものを考えた場合、少しずつ変わっていくのも必然ではないかと思っています。

編集委員として今後も企業の役に立つ情報は当然必要ですが企業に限らず、一般の社会にも役に立つ情報提供も SE 誌としては必要かと思っています。

(福富氏)

田村先生は、いろんなところで指導をなされ、いろんな企業の方とも会われると思うのですが、理事長としてそういうご経験から何かお気づきの事がありましたらよろしく願いいたします。

(田村氏)

SE 誌については、さきほど小川先生から経緯についてお話がありましたが、1974年から始まり、今回が200号ということで、継続する



田村昌三氏

ということは大変なことだと思っています。当初からの狙いは現場の従業員の方や経営者の方を含めた幅広い読者に安全について理解して欲しいというメッセージがあり、また、内容も産業安全がベースになっていますが、工学だけでなく、理学、薬学、医学の方、あるいは人文科学、社会科学が専門の方もコミットしていらっしゃるということで、まさに幅広い視点から安全について話題提供してきたということは、大きな特徴ではないかと思っています。しかも、SE 誌はカラーのイラスト、写真を多く使い、文字を大きくするなど、わかりやすく理解してもらおうというメッセージにこだわり続けてきたということが特徴ではないかと思っています。

その SE 誌200号を迎えるに当たり、これまで編集に当たられた方々のご努力に心から敬意を表する次第です。こういった SE 誌の特徴をぜひ継続して今後も進めていただきたいと思います。

(松尾氏)

今おっしゃったように見るほうはわかりやすいのですが、よくこれだけコンパクトにまとめられているな、編集委員の方はすごいと思うんです。私これを書けと言われてたら、こんなにシンプルでわかりやすくというのは本当に書けないと思います。

誰が読むかをすごく意識して編集されているのではないかと思います。書く人の立場でなく、読む人の立場でまとめていただいているということはよく伝わります。

(小川氏)

そういう意味で言うと、最初に私が言い忘れたのですが、最初は執筆者の名前は入れていなくて、その後の号から原案提供者として記載しています。どういうことかということ、編集委員の責任で雑誌を作るということで全面的に書き直すということを知ってほしいということ、最初をお願いしていた。ただ、原案提供ということでは著者の方からも意見があり、現在は著者の名前が出ようになっています。

ただ、原案提供される方によっては、難しい表現もあり今編集をしていただいている間中典子編集委員から、分かりにくいとの指摘もあり、中村編集委員、福富編集委員長などが手を入れて分かりやすいように努めています。そのため、編集はかなり時間がかかるものとなっており、原稿は4か月前に提出していただくことにしています。そのくらい時間をかけてできるだけわかりやすくするという努力はしております。

(中村氏)

先ほど松尾さんから、だれが読むかの立場から書かれているとおっしゃっていただいたのは本当にうれしいですね。中には、この原稿はだれが読むのだろうというような理解の難しい原稿が来ることもあります。やはり、現場の従業員の方や、安全の知識に詳しくない経営者の方にぜひ読んでいただきたいとすると、図、写真にしてもきれい

なものをつける
とか、難しい漢
字は使用せずひ
らがなにすると
か、用語に脚注
を付けるなども
行っています。

ただ、内容に
ついては、最初
になるべくわか

りやすく書いていただくしかないでしょう。福
山先生は、全面的に書き直されていたとお聞きし
ましたが、なかなかそうもいきません。

(高木氏)

昔も、原案提供者から「我が輩は」というのが
ありました。私はというところを我が輩はですか
ら、これは載せられないだろうというものもあり
ました。

4. 編集側の立場からの、SE 誌に対する評価（自 己評価）。

(福富氏)

確かに昔と比べるとだんだん難しい原稿が増え
てきたように思います。執筆者に学会投稿の経験
者が増えてきたこともあるでしょうね。それで校
正刷にわからないところがあると、常に中村さん
にここわかりませんと無理をお願いしています。
中村さんの活躍大です。

(星野氏)

それはわかり
ますね。技術屋
の方が、皆さん
自分の専門分野
の中に入ってい
くことがあります。医療分野は
典型だと思いま
すが、内科でも
いろんな分野が
あり、ある分野しかわからないお医者さんがいる。
主治医というのが決められなくなっている時代で
いろんな先生が関わることになっている。そうし



中村 順氏

てますます自分の専門しかわからないという人が
増えてきていて、それが、執筆者にもそういう傾
向が表れているのかなと思います。やはり人に知
らしめることのできる能力、それを培ってもら
うためにもこういうやり方を残したほうがいいの
ではないかと思います。そのためには書く人に、こ
れをだれが読むのかということをもっと意識させ
ることが必要ではないでしょうか。

(小川氏)

SE 誌の執筆依頼状にはわかりやすく書いていた
だくようお願いはしていますが、専門家以外に
は分かりにくい原稿を書かれる方もおられます。
特に学術論文を書く人はどうしてもその調子で書
かれますし、中には英文直訳のような文章の方が
おられて、修正を中村さんがしたりしています。

(田村氏)

SE 誌は幅広い読者を対象としているので、わか
りやすく安全のメッセージを伝えるというのが一
番大きな特徴だと思います。専門的な雑誌は、別
にあるわけですから、その特徴を生かすためには、
総合安全工学という視点でできるだけ多くの人に
安全について理解をしていただくということがよ
いのではないのでしょうか。

難しいことをわかりやすく伝えることも大切で
す。ぜひ編集を頑張って続けていただきたくよう
お願いします。

(高木氏)

15年前の SE 誌を見てもみますと、HAZOP、デー
タベース化などの他、安全文化の記事が載ってい
ます。現在、産業安全分野においては、安全文化
は非常に重要視されていますが、それが15年前に
記事が載ってわかりやすく書かれている。これは
非常に価値があるということです。SE 誌に、今提
供している情報というのは、10年、15年先にこん
なことがあったのか、非常に早くから目を付けて
いたのだという評価を受けることにもなります。

平易な安全に関する記事と、今後こういうのが
必要になるかもしれないという情報も併せて提供
していけると非常に面白いですね。価値も出てき
ます。

(小川氏)

そうですね。編集委員会でもそのような先取り

のテーマも考えて取り上げる必要があると思います。

(星野氏)

将来的に考えた場合に、問題点として、日本の製造メーカーはどんどん工場を東南アジアに移していることがあります。また、現場の従業員がオペレートだけするというふうになっていて、SE誌のような出版物に興味を持っているのかなという気がします。もう一つ言うと、今の若い人はスマホしか見ないですよ。スマホ版のSE誌というのができるとみんな見てくれるのかなという気がします。

(中村氏)

補足しますと、既に総安研のホームページにはSE誌の要約を2010年以降はすべて載せて読むことができます。またそれをキーワードで検索できるようにもしています。自然災害などに関する記事のように、一般の方に知っていただいたほうが良いものは、フルペーパーを公開してPDFでダウンロード可能です。SE誌記事をスマホで読むことができます。

(小川氏)

SE誌のバックナンバーをホームページでみて注文いただいているので大事な情報だと思います。

あと、キーワードということがありましたが、SE誌に載った記事で分野が同じようなもので1冊にまとめて、SEシリーズとして出しています。最初は「工場の安全」というテーマでした。工場にかかわる事故が多かったことによると思います。工場の安全にかかわるSE誌の記事をまとめて出しました。その他にも何種類か出しています。情報としてテーマごとにまとめるのも重要と思います。

(高木氏)

SEシリーズはターゲットが絞られているので非常にまとまっていてわかりやすく役に立っていると思います。今後もできたら出していただけるといいと思います。

(松尾氏)

近年日本の企業の海外進出も増加しており、海外のプラントの安全も重要になっている。三井化学でも、海外に拠点を持っています。海外のプラ

ントの安全の責任も国内プラントの安全の責任と同様です。弊社では事故事例、トラブル事例などを英語、中国語に翻訳して世界に発信しています。このSE誌も翻訳は大変ですが、日本の経験や工夫を積み重ねてきた安全の取り組みを海外に紹介するのも大事だと思います。海外へ展開することも将来的には必要ではないかと思っています。

(小川氏)

SE誌も過去に英文概要というのを出したことがあります。昔イギリスの安全衛生庁(HSE)のトムソン氏にそれを送ると抄録を他にも紹介してくれていました。

福山先生に近い人に英訳していただいて作っていたのですが、大変なので、現在は行っておりません。体制によっては海外対応も大切なので、今後考えてもいいかと思っています。

(田村氏)

今後のことについての話題が出ていますが、総安研が行っていることは、まさに総合安全です。最近社会が大きく変わってきている中で、安心・安全をどう考えるかは一つの大きな話題です。例えば、知識、技術の情報発信も重要であり、組織とか文化などいろいろ考えなければならないものもあります。そうした中で多様な視点で安全を考えるのが総安研であり、SE誌の役割です。総安研にはいろいろな分野の方がかかわっておられるので、そういう人を集めて将来にかかわる総合安全の話題について座談会を2年に1回でも開催し、発信するのもよいように思います。また、その成果は英訳をして海外に出していくのも一つの手ではないですか。これからの我が国の安全の海外展開は重要で、日本は貢献できる可能性は十分にもっているのです。そういったものを翻訳して海外に出していくのも一つの方向でしょう。

(福富氏)

座談会というのは面白いかもしれませんね。最近、よくわからないと思っているのは、安全という言葉は表に出っていますが、情報とかITの安全です。セキュリティというのははっきりしているのですが、これらについては定義があまりできていないのではないのでしょうか。このような話題はたくさんあるのではないかと思うので、そうしたテ

マの座談会を行うのはいいのではないのでしょうか。

SE 誌の将来ということでも大切なことですが、安全を定義をしながら進まなければならないところもあるのではないかと考えています。

(中村氏)

図表、タイトルの英訳は可能であり、最近投稿される方の中には、投稿論文などで使われた英語の図表で投稿される方がおられます。現在、SE 誌はそれではわかりにくいので、日本語にかえていただいています。海外対応として、図、表が英語で書かれていけば何とかなるのではないのでしょうか。また、既に記事のタイトル英文表記は表紙の裏のページに記載しています。

なお、ホームページに公開している要約や、記事は文字付の PDF で公開しているので、英語に機械翻訳して読むことも可能です。

(松尾氏)

座談会の話ですが、世の中の変化が激しいので、定期的に座談会を開いて現場の最前線の人の話を聞く必要があると思っています。世の中の変化を定期的にとらえて SE 誌に反映していくのは必要ではないですか。最近の若い人達は文章で考えを伝える事が苦手な人が増えているように思います。座談会で議論をしながら、現場の課題を伝えてもらう事は有効かもしれません。

5. これからの SE 誌について

(福富氏)

それでは、これからの SE 誌にどんなことを期待なさるのか、編集を担当していてどんな方向がいいと感じていらっしゃるのか少し意見交換したいと思います。

(田村氏)

総合安全の視点でできるだけわかりやすく安全についてのメッセージを伝えられるとよいと思います。その一環として折に触れて座談会を開くということについて今後検討をお願いしたい。SE 誌の特徴を生かしていくのが大事なポイントだと思います。

(福富氏)

ホームページはあるのですが、SE 誌を世の中にどういう風にさらに展開していくのか、アイデア

がもうすこし欲しいと思います。今、3,000部印刷しているわけですが、安全に対する社会的なニーズからいうと、本来そんなものではない。ぜひもっと展開したいのですが、どんなことが考えられますでしょうか。

(高木氏)

今、SE 友の会の会員はどのくらいですか。

(小川氏)

個人が60人くらい、法人が50くらいです。SE 友の会は本来個人が対象ですが、法人も認めています。個人には SE 誌は50部くらいしかないということで、大部分は会社・法人です。おそらく会社の中で回覧しているのだと思います。

(松尾氏)

SE 誌は回覧するのではなく、現場にあったほうが良い。SE 誌は経営者にも読んでいただければならないのですが、最前線の運転者の人にどのように気楽に読んでもらえるか、安全について考える機会を増やせるかが必要になってきます。また田村先生のおっしゃられるように安全に携わる人が、総合安全という視点で課題を見ることができると、その能力を身に着けることができるかが重要です。SE 誌の様々な分野の安全のメッセージが、総合安全の視点で装置産業、製造産業にも関係するのだということ現場の人も理解できやすいように、記事を読むときにこういう視点で読んでほしいとの一言、二言を書いていただきたい。専門的な面だけでなく、安全という視点から記事を見てもらうことが必要です。読者にとって必要ではないか。最初の序文にでも書いてもらえればどうか。

(田村氏)

ホームページにできれば中村さんをお願いして要旨一覧を掲載していただき、それを活用することで記事を体系的に見ることができればと思います。ホームページに載せておけば活用してもらえます。

(福富氏)

SE 誌の目次に工夫ができるかもしれません。関連キーワード、関連記事といった形も考えられます。キーワードの選択を行うことにする。著者に任せると難しいのではないかと思います。

(高木氏)

難しいとは思いますがアニメ化することも考えられる。かつて安全工学会でも検討していました。

今ネットの検索は、音声で回答するものがあるので、そういったものも考えられる。

記事で本当に言いたいという要点、核となるものを選べるといいですね。

(松尾氏)

安全に境界はないので、著者と SE 誌のコミュニケーションツールあるいはコミュニケーションネットワークがあつて、記事を書いただけで終わらず、次に記事を書くときにつながるようなネットワークがあるといいかもしれない。

論文を書いたということの目的は、いろんな意見を聞きたいということだと思うので、それが何かにつながるっていく工夫があってもいいのではないかな。

(星野氏)

特定の関連分野で著者に集まっていたいて、意見交換する。今は著者への反響が見られていない。

(田村氏)

読者の声を載せたり、閲覧できる環境をホームページに設けるといいのではないですか。読者からの一言などの場を作る。記事についての感想や、詳しい話をもっと聞きたいとか、こんな記事を書いてもらいたいというような意見を求めたらどうか。

(福富氏)

実際には、反響は少ないかもしれないが、そういう姿勢を見せる必要があるのではないかな。

企業の担当者のご意見や、SE 誌に対するフィードバックがあるとありがたいし、賛助会員サービスにもなるのではないかと思います。

二本立てで、読者の声と賛助会員の意見をみえるようにするとよいかもしれません。

(星野氏)

SE 誌の表紙と裏表紙の絵の意味は皆さん見えていますかね。裏のイラストの方が実は面白いし、安全にかかわっている。

(福富氏)

記事の最後に「まとめ」があるとよいのではないかな。何が言いたいかが重要なので、「おわりに」

では何かはっきりしないので、まとめを書いてもらいたい。原稿のテンプレートに「まとめ」を入れるようにしたい。

(中村氏)

要約の位置とまとめの扱いについてそのように検討することにします。

現在の印刷会社からは印刷原稿のテキスト付きの PDF でもらっているので、全記事のホームページによる公開も可能です。学会誌などでは最近フルペーパーで公開しています。

(福富氏)

それでは本日は長時間にわたる座談会をありがとうございました。いろいろとあらためてご意見、ご指摘、そして将来へのご意見をいただきました。

貴重なご意見をありがとうございました。

本日何った内容を今後の SE 誌の展開にぜひ生かしていきたいと思います。